



【編集部】テレビ東京の名物番組『TVチャンピオン』のケータイ電話通選手権（2004年当時）で準優勝したモバイル達人の石川温氏。当時、雑誌編集者から独立した直後の「快拳」で、その後はケータイ・モバイルジャーナリストとしてテレビやラジオ、雑誌、Webマガジンなどで活躍する。モバイルケータイ達人の視線で、5Gがもたらすデジタルトランスフォーメーション（DX）を連載してもらう。

# ファーウェイが自社開発した OS「Harmony OS 2」のもくろみ

6月2日

自社開発 OS「Harmony OS 2」発表

中国・ファーウェイは2021年6月2日、自社開発 OS の最新バージョン「Harmony OS 2」を発表した。ファーウェイは、かつてのアメリカ・トランプ政権時代に輸出禁止措置が取られて以降、グーグルとの取り引きを禁じられた。結果として、グーグルのアプリ配信プラットフォーム「Google Play」をファーウェイ製のスマートフォンに搭載できない状態に追い込まれていた。

サムスン電子に続く世界第2位のスマートフォンメーカーにまで上り詰めたが、Google Play が搭載できないとあって、シェアは一気に低落。いまでは、同じ中国のXiaomi（シャオミ）やOPPO（オッポ）の後塵を拝すようになってしまった。

仮にファーウェイのスマートフォンを購入した場合、ユーザーはグーグルのサービスであるGMailやGoogle Mapなどがまったく使えない状態となっている。地図アプリを使いたければ、中国製の地図アプリを使わなくてはならないなど、不都合が多い。

現在、日本で売られているファーウェイのスマートフォンは、日本のアプリ開発者がアプリを提供しつつあるが、それでもGoogle Playの充実度には及ばず、使い勝手がどうしてもイマイチとなってしまっているのだ。

ファーウェイとしては、世界的にはGoogle Playのニーズが高いのは十分承知だが、現状ではGoogle Playを搭載する術はない。そこで、世界での展開はあきらめ、むしろ中国国内に焦点を当て、製品の開発や販売を行っているようだ。世界が駄目でも中国市場でナンバーワンになれば、ある程度、会社の規模を維持することは可能だ。そのため、中国市場でスマートフォンを売りまくっているのだが、その影響を受けているのが中国メーカーのXiaomiやOPPOだ。彼らがこの1～2年、日本市場で積極的に商品展開をしているのは「ファーウェイが中国市場で本気を出し、中国で居場所がなくなったから」と見る業界関係者も多い。

## デジタル機器を Harmony OS 2 で統合 アップルの世界観を目指す

ファーウェイは、これまでスマートテレビなどに搭載していたHarmonyOSをスマートフォンやスマートウォッチまでに拡大。エコシステムを広げ、機器間の連携を強化していく方針を示した。例えば、スマートフォンにかかってきたビデオ通話をスマートテレビに転送したり、スマートテレビのカメラを使ってビデオ通話するといったことが可能になる。

ファーウェイはスマートフォン、スマート

ウォッチ、スマートテレビ、タブレット、自動車内のディスプレイなど、身の回りのあらゆるデジタル機器をHarmony OS 2 対応させることで、デバイス間をシームレスに移動できるような世界観を目指す戦略だ。

ファーウェイが自社開発の独自 OS で目指すのは、まさにアップルの世界観だろう。アップルはiPhoneやiPad、Mac、Apple Watchなど、さまざまなデバイスを出しているが、それらがApple IDによって連携する世界観を実現しつつある。iMessageやビデオ通話の「FaceTime」が着信すれば、iPhoneだけでなく、同時にMacやiPadでも対応できる。ファーウェイでも、例えばスマートフォンで撮影した画像をパソコンにかざすと、ファイルを簡単に転送できる機能などを提供している。パソコンはWindowsではあるが、ファーウェイ製のパソコンとスマートフォンであれば、こうした機器連携が可能なのだ。

ファーウェイは、より高い利便性をユーザーに提供するのであれば、スマートフォンのOSは自社開発が望ましい。パソコンのOSをWindowsから自社開発に切り替えるのは現実的とは言えないが、それ以外のスマートテレビやタブレットにおいては、自社開発の方が望ましいのは間違いない。

アップルはなんといっても、iPhoneやMacといったハードウェアだけでなく、OSというソフトウェアも一体となって開発、



スマートフォン、スマートウォッチ、スマートテレビ、タブレット、自動車内ディスプレイなどを OS 「Harmony OS2」 で一気通貫

製造する「垂直統合モデル」が強みとされている。さらにアップルは、昨年から Mac や iPad 向けのプロセッサも「M1」という自社開発のものに切り替えつつある。これまではインテルなど他社のプロセッサに依存していたが、製造の遅れやパフォーマンス面において、製品開発で足を引っ張られることも多々あった。プロセッサという心臓部でさえも自社設計に切り替えることで、ハードとソフトの一体開発が可能となり、他社との差別化がさらにやりやすくなったはずだ。

## アップルとファーウェイの決定的な違い

実はファーウェイも、ハードウェアや OS のみならず、プロセッサにおいても自社開発している企業だ。スマートフォン向けチップセットはファーウェイ傘下の半導体メーカー「ハイシリコン」が手がける「Kirin」シリーズを搭載。性能の高さで、他社の Android スマートフォンとの違いを見せていた。

しかし、こちらもアメリカ連邦政府による禁輸措置により、製造ができなくなってしまっている。なぜなら、ハイシリコンは台湾・TSMC にプロセッサの製造委託をしていたが、アメリカからの規制強化によって、アメリカから一部機器を調達している TSMC への委託ができなくなってしまった

のだ。これにより、ファーウェイは自社設計の Kirin プロセッサを製造したくてもできない状態なのだ。

ファーウェイは、規制強化が出る前に相当数のプロセッサを買い占めたようだが、それも在庫が底を突きつつある。ファーウェイは今後、パフォーマンスの低いプロセッサを別の社から調達して、スマートフォンを作らざるを得なくなるようだ。

本来であれば、ハイシリコン自身がプロセッサを製造できればいいのだが、いまの TSMC が持つ技術力には追い付くことは難しいとされている。

## HarmonyOS 路線の一方で Android への鞍替えも準備か

アップルのような垂直統合モデルを目指すファーウェイであるが、スマホメーカー関係者は「HarmonyOS を自社開発していくと言っているが、実際は Android ベースのままでいくのではないかと。万が一、米中

経済摩擦が落ち着いたなら、すぐに Android に戻せるようにしておいた方が、ファーウェイにとってはメリットが大きいはず」と語る。確かに、Harmony OS 2 が発表された直後、一部のメディアでは「Android ベースであり、以前から何も変わっていない」という指摘が出ていた。

HarmonyOS で垂直統合モデルを突き進んだとしても、中国市場でのみ販売する製品にしかならない。ファーウェイとしては、米中貿易摩擦が収束し、すぐにも Android スマホを作った方が、世界で売れるチャンスが舞い戻ってくる。プロセッサも自前で製造するというのは現実的ではなく、TSMC に委託できる体制が早期に戻ってきた方がファーウェイにとってはありがたいはずだ。

トランプ政権からバイデン新体制になったものの、中国に対する姿勢にあまり変化は見られない。ファーウェイにとっては、まだしばらく我慢せざるを得ない状況にはかわりない。

5G 時代が本格化する中、さまざまなデバイスがネットにつながろうとしている。当面、ファーウェイとしては表向き、HarmonyOS 路線を突き進むように見せているが、いつでも軌道修正して Android に鞍替えできるよう水面下で準備を進めている可能性もありそうだ



HarmonyOS 路線を突き進むのか、という疑問の声も聞こえる

